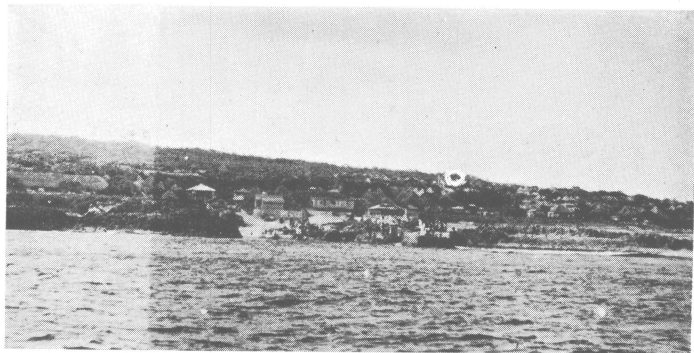
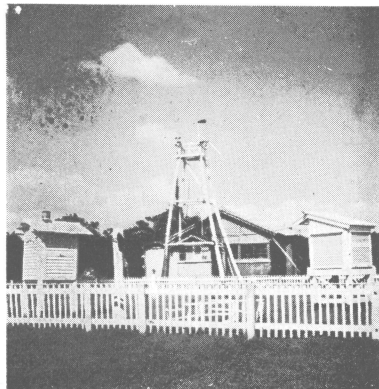


## 南の島の沖永良部

沖永良部島は地図にも針の先程に記入してある、日本行政権の最南端で沖繩本島を目近に眺られる孤島であるが、戦前は日本でただ一つの白百合の栽培地で、クリスマス用として北米および欧州に輸出され、国内より外地で永良部百合として知られた島である。



海上より部落と当所を望む（○印当所，測風塔，アンテナ柱，庁舎屋根が見える）



沖永良部測候所全景

この島は鹿児島より南西約470軒にあり、鹿児島港より船に乗ると名瀬経由で2晝夜目に島に到着する。島の周囲は53軒で全島隆起、珊瑚礁より成り、大体北東より南西に琵琶形に延び、最長線20軒で島の中央部に海拔246米の大山があるが、全島平原地で、人口は2万余人で男より女が1割程多いのが特徴である。

文久2年（1862年）に西郷隆盛が流刑になった地である。

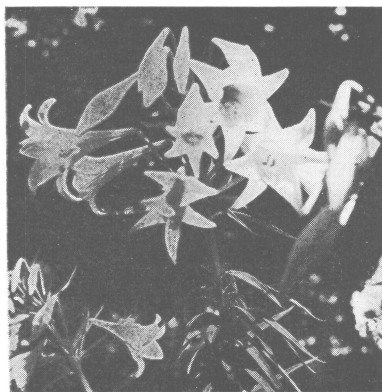
島民の家屋は防風対策を第1条件として建てて一般に低くして横木を多く使い、交叉木を要所に使用して屋敷の周囲には石垣を築き、大木を植え、暴風に備えてあるため、部落全体を遠方より眺める時は、さながら森林を想わせ、台風対策にそなえているため家屋に対する被害は少ない。

大正10年頃より2期米を耕作し、甘藷はほとんど年中耕作でき、食糧として最も重要である。全島栽培し、本島での重要な移出品であるが、一度台風が来ると風害潮害のため農作物は全滅し、島民の1年間の努力も水泡に帰し、島の財政は台風に左右されていると云われている。この島は名瀬より沖繩に近く、8時間内外で沖繩に行けるが、当群島の日本復帰により沖繩本島を目下に眺めながら完全に竹のカーテンが下りているが、島の文化は沖繩と大島の両方の影響をうけている。

当所は昭和27年に現在の琉球气象台で沖永良部島に測候所設立の計画がなされているが、当時の琉球政府の予算の都合で計画実施困難という苦境にあった。沖永良部

測候所の基礎を築いたのは沖永良部全島民の気象事業に対する深い理解によるものである。

当地方の通信施設は、奄美群島が日本復帰前までは当地の郵便局と名瀬郵便局との間で1日4、5時間の無線通信時間でそれも昼間だけで、特に当所が設立されるまでは台風情報、台風警報が名瀬測候所より発表になっても台風が当地方を通過してから情報、警報が入電するという状態で、陸上での被害はもちろん、昭和24年から昭和26年までの3年間で、沖永良部地区における船舶事故は大小13隻におよび、島民は常に島の復興は測候所の設立にあると叫ばれ、数回にわたって島民有志が沖繩本島に往来して琉球政府に測候所の設置の陳情がなされ、敷地庁舎は島民の寄贈とし、敷地は希望する場所を提供することで、現在の琉球気象台長が選定して設立されたのが当測候所であるから、島民の当所を信頼利用することは格別で、娯楽のない孤島ではあるが働きがいのある日を送っている。月に1回程巡って来る巡回映画を青天井の下で見ると楽しみで、年中洋服も1着あれば十分に来島以来オーバーは見たこともない。年中バナナ、パイナップル、黒糖、糖酒があるためか、全職員益々元氣旺盛で、設立以来当所には病人が出ないのは当所の一つの誇としている。特に当所職員の念願は最南端測候所としての重責を果たすことにあると思ひ、日夜孤島で努力している。（沖永良部測候所 重村康雄）



永良部白百合